



TITLE:

日濠貿易の調整

AUTHOR(S):

谷口, 吉彦

CITATION:

谷口, 吉彦. 日濠貿易の調整. 經濟論叢 1934, 39(1): 56-81

ISSUE DATE:

1934-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130466>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟叢論

第一號

第三十九卷

昭和九年七月一日發行

(禁轉載)

論叢

狩獵免許税に就きて

法學博士 神戸正雄

生産力の問題

文學博士 高田保馬

昭和五年の我が國民所得を論ず

經濟學博士 汐見三郎

時論

日濠貿易の調整

經濟學博士 谷口吉彦

研究

工場委員會の型の生因

經濟學士 大塚一朗

貨幣的景氣論史

經濟學士 柴田敬

植民地貨幣制度より見たる金爲替準備

經濟學士 松岡孝兒

記事

經濟學部創立十五年記念會記事

同上 記念展覽會陳列圖書目錄

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

時 論

日濠貿易の調整

谷 口 吉 彦

目次	一、貿易調整の目的と目標	二、日濠貿易の發展	三、日濠貿易の内容
	四、日濠市場の相互重要	五、積極的調整の方法	六、消極的調整の方法
	七、日濠問題の特異性		

一、貿易調整の目的と目標

日濠貿易に限らず、一般に今日の問題となつてゐる貿易調整は、何を目的として如何なる目標に到達せんとするものであるか、言ふまでもなく貿易調整は、今日における謂はゆる貿易統制の一面であり、その貿易統制はまた、戦後の永續的不況と最近の世界恐慌から、必然に惹きおこされた一般的の統制經濟の一面である。それ故に問題の貿易調整もまた、根本的には恐慌打開の方法として、消極的に國內市場を自國産業のために維持し、さらに積極的に國外市場を自國産業のために獲得せんとする目的をもつてゐる。

併しながら、この目的を達せんとする貿易統制の手段には、今日に利用せられつゝあるものだけでなく、すでに種々の方法がある。例へば戦前から利用されつゝあつた關稅による貿易統制は、今日ますます之を強化しつゝあるのみならず、最近には謂はゆる差別關稅といふ新たな形態を採るに至つた。けれども關稅の主たる目的は、何と言つても消極的な國內市場の擁護以上に出でず、且つその効果は全く間接的であつて、殊に爲替戰爭の盛んに行はるゝ時代になると、之によつて適確有效に國內市場を擁護することは、甚だ困難となつて来る。

そこで第二の方法として、直接に輸入を制限せんとする輸入許可制または輸入割當制が用ひられる。是等の方法では、直接に輸入數量を制限するから、その効果は極めて適確に實現されるけれども、而かもその効果はたゞ消極的に國內市場を擁護するに止り、對外的には却つて報復的に種々の障害を惹きおこし、外國市場を擴張するが如きは、殆んど期待することは出来ない。

之に反して第三の爲替戰爭は、自國の爲替相場を引下げることによつて、外國品の輸入を防遏して國內市場を擁護し、輸出品を引下げて外國市場に進出するから、これは右の二つに比較すれば、積極的な効果を期待することが出来る。現に吾國の最近の進出は、主としてこの爲替の下落によるものであるが、併し爲替相場による貿易統制の効果は、さきの關稅の方法と同じく、商品價格を動かすことによつて、間接に貿易を統制せんとするものであるから、その効果は必ずしも適確ではない。加ふるに爲替相場は相對的なものであるから、例へば英米間の爲替戰爭における

が如く、自國の爲替相場を引下げたところで、相手方が同じ程度またはそれ以上に引下げて來れば、その効果は全く期待することは出来ない。それ故に何等かの直接方法によつて、適確有效に貿易を統制しようと共に、この統制をして積極的に外國市場に進出する方法たらしむるものはないか、これが問題となつて來る。

貿易調整は即ちこの最後の要求から生れたものと言へる。調整の日標または方向より言へば、二國間の貿易を成るべく均衡に近づけんとするものであるから、之を「交換貿易制」Barter systemと言ふことも出来る。たゞし、バーター・システムは、例へば日蘭會商において問題となれるが如く、相手方の輸入制限または輸入割當に對する一つの緩和策として、吾國より進んでバーター制を提案する場合には、それは間接にはこれまで進出せる輸出を維持するためではあつても、直接にはそのバーター制によつて、却つて輸入を増加するものである。之に反して蘭印がその輸入制限を撤廢する代償として、バーター制を提案し來るとせば、それは蘭印輸出を増加して、吾國との片貿易を調整せんとするものである。

かくして貿易調整とは、一國に對する輸入超過國が、その國との片貿易を調整して、輸出を増加せしめんとする方法である。その目標は輸出入の個別的均衡であるが、その目的は輸出増進にある。謂はゆるバーター制とは最も近いけれども、必ずしも嚴格に同義ではない。單なるバーター制では、その直接の結果として、却つて輸入増加を來たすことがありうるけれども、貿易調整

の主張では、直接の結果は輸出の増加に限られる。たゞこの輸出の増加は、之を相手國より見れば輸入の増加に外ならぬから、そこで一國が自國の輸出増加のために主張する貿易調整も、之を相手國より見れば單なるバーター制に過ぎない。要するに貿易調整は入超國が、輸出を増加することによつて、その入超を調整せんとするものであつて、その目標は貿易均衡にある。たゞこの貿易均衡は、入超國が輸入を制限することによつて達成せらるゝ消極的均衡ではなくて、寧ろ輸出を増加することによつて達成せらるゝ積極的均衡であり、また必ずしも文字通りの絶對的均衡を意味せず、出來るだけに近づかんとする相對的均衡を意味することもある。

最後に貿易調整は、交換貿易制 (Barter system) と似而非なる爲替決済協定 (Clearing arrangement) とも異なる。蓋し二國間の國際收支を均衡せしむることによつて、爲替決済を容易ならしめんとする協定では、必ずしも貿易上の均衡を必要とせず、單に國際收支を均衡せしむれば足りるからである。従つて例へば日蘭貿易の不均衡をそのまゝに續けて、たゞ吾國の出超手取金をそのまゝ彼地に留むるの方法を講ずるならば、貿易の不均衡に拘らず、國際收支を均衡せしめ得べく、こゝに爲替決済協定は成立しうるけれども、貿易調整またはバーター制は、この場合にも實現されてゐないからである。

この論文は右の意味における貿易調整といふ線に沿うて、日濠貿易を再検討せんとするものである。日印・日英・日蘭等の諸問題が相次いで起つた後には、日濠問題もまた必然に避くべからざ

る運命にあると人は考へる。濠洲外相の來朝を機會に、日濠貿易の問題もまた漸く世人の注意を惹かんとしつゝある。上田貞次郎博士の論文の如きもまた、極めて有益なる文献ではあるが、茲では多少それとは異なる視角から、同じ問題を研究せんとするものである。

二、日濠貿易の發展

いま明治十一年（一八七八）より昭和八年（一九三三年）に至る五十六年間の日濠貿易について、その發展を跡づけるときは、第一表に示さるゝ如く、その絶對的數字は輸出・輸入ともに顯著なる増大を示し、この間の累計は、輸出八億二千八百萬圓に對して、輸入は十九億二千萬圓に達し約二倍半に近き輸入をなしてゐる。最近十年間について見るもまた、輸出四億一千萬圓に對し輸入十三億三千萬圓に達し、これは三倍以上の輸入額を示してゐる。

これだけの數字によつて直ちに明らかなることは、日濠貿易は甚だしき片貿易の状態にあり、且つそれは全體として著しく吾國に不利なる片貿易であるといふ點にある。即ち濠洲に對しては吾國は全體として顯著なる輸入超過國である。

併しながら、この入超傾向は、最初から存在するものではない。第一表の「輸入を一〇〇とする輸出」において示さるゝ如く、明治初年には實に驚くべき輸出超過であつた。この出超傾向は大體において明治時代を通じて繼續したが、明治終期から大正初期にわたつて、この傾向は逆轉

1) 上田貞次郎博士、日濠貿易の將來（雜誌、『經濟』昭和九年六月號）

第一表 日 濠 貿 易 の 發 展 ¹⁾

日 濠 貿 易 の 調 整	年次	輸 出	輸 入	輸入を100 とする輸出	年次	輸 出	輸 入	輸入を100 とする輸出
	明治	千円	千円		明治	千円	千円	
	11	255	23	1108.6	41	5 285	2 094	252.4
	12	80	78	102.6	42	5 812	3 366	172.7
	13	180	38	473.7	43	6 552	7 602	85.2
	14	149	71	210.0	44	8 103	7 927	102.2
	15	160	74	216.2	大正 1	8 629	12 792	67.5
	16	439	91	482.4	2	8 638	14 943	57.8
	17	246	26	946.2	3	10 868	14 580	74.5
	18	285	72	365.8	4	18 098	28 571	63.3
	19	470	80	587.5	5	27 776	43 333	64.1
	20	535	32	1671.9	6	27 289	32 935	82.9
	21	638	218	292.7	7	64 828	48 874	132.6
	22	486	267	182.0	8	30 826	56 630	54.4
	23	795	334	238.0	9	58 115	62 459	93.0
	24	757	229	330.6	10	21 559	36 398	59.2
	25	732	273	268.1	11	36 712	82 090	44.7
	26	891	319	279.3	12	32 629	96 623	33.8
	27	1 098	535	205.2	13	41 907	119 971	34.9
	28	1 281	1 032	124.1	14	47 496	149 969	31.7
	29	1 458	835	174.6	15	51 611	128 396	40.2
	30	1 875	897	209.0	昭和 2	50 566	122 840	41.2
	31	1 996	1 403	142.3	3	43 000	130 494	33.0
	32	2 170	1 709	127.0	4	44 075	132 600	33.2
	33	2 531	2 456	103.1	5	25 486	94 308	27.0
	34	2 533	1 778	142.5	6	18 405	113 337	16.2
	35	3 172	1 672	189.7	7	36 895	134 277	27.5
	36	3 352	1 200	279.3	8	51 416	204 586	25.1
	37	4 439	4 399	101.0	總計	828 682	1 920 084	43.2
	38	4 073	6 001	67.9	近 世 十 年 計	410 857	1 330 778	30.9
	39	4 226	4 128	102.4				
	40	4 794	7 819	61.3				

1) 大藏省、大日本外國貿易月表に據る(以下特記せざるものは皆同じ)

し、大正元年以後は唯一の例外たる大正七年を除き、その他は總て入超をもつて今日に及んでゐる。即ち極めて大體に言へば、今日までの日濠貿易は、前半において出超、後半に於て入超を示し、而かも前半の出超程度は年と共に遞減して、遂に後半の入超に入り、この入超は年と共にますますその程度を加へつゝある。即ち大正初期の輸出は、輸入を一〇〇として六〇乃至七〇以上を占めてゐたが、これは年と共に漸減して、最近では二五程度にまで下つてゐる。即ち現在では輸出は輸入の四分の一程度に過ぎない状態にある。それ故に日濠貿易には、最初から今日まで前後を通じて一貫した傾向が認められる。輸出の相對的減退または輸入の相對的増進これである。

この一貫せる傾向は今後においても、何等かの貿易工作の加へられざる以上は、引續いて現はれる傾向にあると認めねばならぬ。すでに今日においても輸入二億圓に對する輸出五千萬圓（昭和八年）といふ四對一の片貿易にある上に、今後もこの不均衡はますます加重される傾向にあるとすれば、これは吾國として之を自然に放任することは出来ない。殊に今日の時代は、個別的の貿易均衡を意思的に統制的に實現せんとする貿易統制の時代である。之に加ふるに、濠洲側では周知のごとく、英帝國ブロックを構成する一員として、わが國の輸出貿易を差別的に壓迫しつつある。茲にわれ／＼が日濠貿易の問題を、吾國の側よりする貿易調整の見地から見直さんとする意味は、これらの諸點にあるものであるが、その前提としては尙ほ一つ日濠貿易の内容につき、その發展傾向を明らかにして置かねばならぬ。

三、日濠貿易の内容

いま大正十三年（一九二四）年より昭和八年（一九三三年）に至る最近十年間の日濠貿易につき、先づ吾國からの輸出品について見るに、第二表に示さるゝ如く、輸出總額はこの十年間に可なり増減し、五千萬圓以上から二千萬圓以下にまで上下してゐる。殊に世界恐慌後の昭和五・六・七年には著しく低下し、最後に吾國の最近の進出によつて、昨年に至つて十年前の五千萬圓程度を回復してゐる。この年を除けば、この十年間は寧ろ漸減傾向にあつたと言へる。即ち前述の吾國の入超が増加の傾向にあるのは、主として輸出の減退に負ふものである。

次に主要なる輸出品について見るに、何れの年においても、絹織物（人絹を含む）をもつて最高とし、總輸出の四割ないし五割を占めてゐる。之に次ぐは綿織物であつて、全體の一割ないし二割を占める。その他は生絲・陶磁器・木材・硝子及同製品・玩具等これに次ぐが、輸出の太宗は絹織物・綿織物の二つと言はねばならぬ。而して最近十年間の傾向について見るに、第二表に示さるゝ如く、第一の絹織物については、著しく減退傾向を示してゐる。第二の綿織物もまた、昨 year を除けば著しく減退傾向にある。その他の商品では、生絲の著しき進出を見る外は、大體は漸減傾向のものが多い。かくして前述の輸出全體の傾向が結果されたものである。

第二表 濠洲への主要輸出品

年次	輸出總額 千円	絹織物 千円	綿織物 千円	生絲 千円	陶磁器 千円	日濠貿易の調整
大正13	41 907	23 283	7 746	559	1 031	
14	47 496	24 659	8 297	1 103	1 032	
15	51 611	30 436	6 947	1 958	1 111	
昭和 2	50 563	32 578	4 731	1 928	972	
3	43 000	28 314	2 391	2 035	1 172	
4	44 075	26 271	2 927	2 352	1 159	
5	25 486	13 797	2 441	2 783	769	
6	18 405	9 329	2 856	1 928	665	
7	36 895	16 623	4 874	3 165	1 769	
8	51 416	19 934	10 029	3 297	2 707	
計	410 857	225 224	53 239	21 108	12 386	

年次	木材 千円	硝子及 製品 千円	玩具 千円	七品計 千円	輸出總額 に對する %	第三十九卷 六四 第一號 六四
大正13	1 508	704	509	35 340	84.3	
14	1 893	1 020	662	38 666	81.4	
15	1 755	843	473	43 523	84.3	
昭和 2	2 041	770	402	43 422	85.9	
3	1 742	625	459	36 738	85.0	
4	2 190	614	473	35 986	81.6	
5	1 815	304	350	22 259	87.3	
6	69	80	207	15 134	82.2	
7	162	357	861	27 810	75.4	
8	211	755	1 811	38 744	75.4	
計	13 386	6 072	6 207	337 662	82.2	

濠洲より吾國への輸入品について見るに、先づ輸入總額は昨年を除いては、この十年間に著しく變化してゐない。而してこの輸入品はまた、第三表に示さるゝ如く、殆んど羊毛・小麥の二品をもつて占められ、その九割以上を占めて、最も顯著な集中性を示してゐる。従つてまた、輸入總額の變動如何は、全く羊毛・小麥の輸入如何に依存するものであつて、その他の輸入品のうち

稍々著しき亞鉛・鉛・牛脂の如きも、殆んど重要な役割を演じてゐない。

第三表 濠洲よりの主要輸入品

年次	輸入總額 千円	羊毛 千円	小麥 千円	亞鉛 千円
大正13	119 971	66 149	30 150	6 141
14	149 969	96 826	31 243	6 586
15	128 396	74 151	35 102	4 544
昭和 2	122 840	94 601	13 982	3 212
3	130 494	105 254	9 710	3 653
4	132 600	99 059	15 407	2 920
5	94 308	72 336	8 639	1 983
6	113 337	83 295	22 466	1 198
7	134 277	84 245	40 056	1 594
8	204 586	156 513	33 886	2 102
計	1 330 778	932 429	240 691	33 933

年次	牛脂 千円	鉛 千円	五品計 千円	總額に對 する%
大正13	6 047	5 056	113 543	94.6
14	4 853	3 840	143 348	95.6
15	5 776	1 822	121 395	94.5
昭和 2	4 637	1 172	117 604	95.7
3	4 807	843	124 267	95.2
4	4 482	1 342	123 210	92.9
5	3 468	582	87 058	92.3
6	2 382	195	109 536	96.6
7	2 437	322	128 654	95.8
8	3 250	249	196 000	95.8
計	42 139	15 423	1 264 615	95.0

日濠貿易の内容を検討して、われ々の注意すべき要點は、

第一に、わが國の入超傾向は最近著しく遞増しつつあるが、之は主として、吾が輸出の減退によるものであつて、昨年を除けば輸入の絶對額は著しく變化してゐない。

第二に、併しながら、貿易減退時代において、且つまた輸出の減退せるに對比すれば、輸入は

相對的には著増しつゝあると言ふことが出来る。

第三に、昨年の輸入の激増は、主として羊毛の輸入増加に歸せられ、且つこの傾向は、今後も續きうること。

第四に、濠洲への輸出品は主として半成または完成の工業品であり、輸入品は主として、原料品・食料品の農産物である。而して輸出・輸入ともに、殊に輸入において集中性が極めてつよいこと、これである。

四、日濠市場の相互重要

日濠貿易の調整を考ふるに當つては、先づ兩國の相互依存の關係が、如何なる重要程度をもつてゐるかを知らねばならぬ。そのためには先づ第一に、貿易價額について、吾國の濠洲貿易は、吾國全體の貿易上に如何なる地位を占めるか、また濠洲の日本貿易は、濠洲全體の貿易上に如何なる地位を占めるか、且つこれら相互の地位は最近において如何なる發展をなしつゝあるかを知らねばならず、第二に主要貿易品の各々について同様の相互關係を知らねばならぬ。

第一に先づ吾國の貿易における濠洲の地位を最近十年間について見るに、第四表に示さるゝ如く、輸出においては二―三%を占め、この地位は十年來やゝ漸落の傾向にあつたが、最近一、二年來は急速に向上して、再び三%に近く、舊地位を回復せんとしつゝある。然るに輸入におい

ては、對濠洲貿易の地位は遙かに高く、五—六%から最近では九—一〇%の地位を占めてゐるのみならず、この地位は最近の十年間において著しく向上しつゝあることが判る。即ち吾國における濠洲貿易の地位は、輸出市場としては約三%、輸入市場としては約一〇%を占めつゝあることを知る。

第四表 日本における濠洲貿易の地位

年次	濠洲へ 輸出	輸出總額	輸出總額に 對する濠洲 輸出の%	濠洲より 輸入	輸入總額	輸入總額に 對する濠洲 輸入の%
一九二四	四一、九〇七 <small>千円</small>	一、八〇七、〇三四 <small>千円</small>	二・三三	一九、九七一 <small>千円</small>	二、四五三、四〇三 <small>千円</small>	四・八九
一九二五	四七、四九六	二、三〇五、五八九	二・〇六	一九、九六九	二、五七二、六五七	五・八三
一九二六	五、六一一	二、〇四四、七七	二・五三	二八、三九六	二、三七七、四八四	五・四〇
一九二七	五〇、五六六	一、九九三、三七	二・五四	三三、八四〇	二、一七九、一五三	五・六四
一九二八	四四、〇〇〇	一、九七一、九五五	二・一八	二〇、四九四	二、一九六、三三四	五・六四
一九二九	四四、〇七五	二、一四八、六八	二・〇五	一三、六〇〇	二、二六、二四〇	五・六
一九三〇	二五、四八六	一、四六九、八五二	一・七	九四、五〇八	一、五四六、〇七〇	六・二〇
一九三一	一八、四四五	一、四六六、九八一	一・六	一二、三七七	一、三三三、六七二	九・七
一九三二	三六、八九五	一、四〇九、九八一	二・三	一四、二七七	一、四三二、四六一	九・六
一九三三	五一、四一六	一、八六一、〇四五	二・六	二四、五六六	一、九七、二九	一〇・七

第二に濠洲における吾國貿易の地位を同様に最近十年間について見るに、第五表は恰かもわが輸出貿易の著しく進出したる一九三二年後半期以後の數字を含んでゐないから、最近の狀態は現

はれてゐないが、姑らく之に據るとすれば、

第五表 濠洲における日本貿易の地位¹⁾

年次	日本へ輸出	輸出總額に對する日本の輸出の%	日本より輸入	輸入總額に對する日本の輸入の%
一九二二—二三	九、三〇九 ^{千磅}	七・六	三、九三六 ^{千磅}	二・九
一九二三—二四	二、五五五	九・七	三、五五七	二・七
一九二四—二五	二、六四六	七・九	四、一四六	二・四
一九二五—二六	二、〇四三	七・四	四、三七三	二・八
一九二六—二七	二、〇六三	七・五	五、一八三	三・五
一九二七—二八	三、五七一	九・八	四、二八二	二・九
一九二八—二九	二、五八	八・三	四、七〇七	三・六
一九二九—三〇	六、五五五	六・七	四、一八一	三・四
一九三〇—三一	九、五〇〇	一〇・六	三、二九	四・五
一九三一—三二	二、六九	三・三	二、三六	五・九

日本への輸出は、その絶對額には殆んど著しい變化なきに拘らず、輸出全體に對するその地位は、この十年間に次第に向上してゐる。即ち最初の八%内外から、最近の一二%に進んでゐる。これは濠洲から他の諸國への輸出が著しく減退したからに外ならぬ。然るに日本よりの輸入は、その絶對額において著しく減退しつつあるに拘らず、輸入全體に對する割合は、反對に著しく遞増して、最初の三%内外から最近の五%以上に上つてゐる。それ故に姑らく絶對額を別として、

1) Official year book of The Commonwealth of Australia, No. 21 (1928), No. 26 (1933), に據る。

たゞ相對的地位についてのみ言ふ時は、濠洲における對日貿易の地位は、輸出・輸入ともに、最近十年間に著しくその重要を加へ、その割合はこの間にほゞ倍加されてゐる。

之を前の吾國における濠洲貿易の地位と對比するときは、吾國の輸入(即ち濠洲の輸出)は五—六%から九—一〇%に増進して、ほゞ濠洲側の事情と照應せるに拘らず、ひとり吾國の輸出(即ち濠洲の輸入)は、却つて減退傾向さへ示してゐる。これは吾國の對濠洲輸出が、特に著しく不振であることを證すものである。

第三に、吾國の輸出品のうち、その過半を占むる絹織物・綿織物の二品につき、各々輸出總額に對する對濠輸出の割合を検するに、第六表に示さるゝ如く、絹織物(人絹織物を含む)は、最初の二〇%以上から漸減傾向をとつて、最近では一五%以下に落ちてゐる。然るに綿織物の地位は之よりも遙かに低く、最初は二%以上に過ぎないが、中頃は減退して一%以下に落ち、最近また二%以上に回復しつゝある。

第六表 對濠主要輸出品の地位

年次	絹織物及人絹織物			綿織物		
	濠洲へ輸出	輸出總額	輸出總額に對する濠洲輸出の%	濠洲へ輸出	輸出總額	輸出總額に對する濠洲輸出の%
一九二四	千円 三三、八二	千円 二五、八四〇	一八・五	千円 七、七五	千円 三六、五七	二・三
一九二五	千円 一四、六五	千円 二六、九八	二・八	千円 八、五八	千円 四三、八五	一・九

日濠貿易の調整

第三十九卷

六九

第一號

六九

一九二六	三〇、四六	一三、〇七〇	三・九〇	六、九四七	四六、三四四	一・七
一九二七	三三、五七	一五、六二五	三・三六	四、八八	三三、八六	一・六
一九二八	二八、三四	一四、〇五九	三・三	二、九二	三五、二七	〇・六
一九二九	二六、二七一	一四、九五四	二・七三	二、九七	四二、七〇六	〇・七
一九三〇	一三、七九七	一〇、七一〇	三・七〇	二、四四	二七、一六	〇・六
一九三一	九、三九	八、七六六	二・二七	二、八五	一九、七三一	一・四
一九三二	六、六三	二、〇八七	三・〇〇	四、八七四	二八、七三	一・九
一九三三	一九、九四	一四、九六	二・二五	一〇、〇元	三八、三五	二・三

第四に濠洲より日本に輸出さるゝ商品のうち、その九〇%以上を占むる羊毛・小麥の二つにつき、濠洲における吾國の地位を見るに、第七表に示さるゝ如く、羊毛は最初の一五%より最近の二三%以上に遞増し、今日では輸出の四分の一近くは吾國に向けられて、可なり重要な地位を占めてゐる。之に比すれば小麥の地位は低く、最初の六%から次第に遞増して一七%以上に進んでゐる。羊毛も小麥も吾國の占むる地位は、次第に重要を加へつゝある傾向は、注意せねばならぬ。

第七表 對日主要輸出品の地位¹⁾

年次	羊	毛	小	麥
	日本へ輸出 輸出總額 對する日本 輸出%	日本へ輸出 輸出總額 對する日本 輸出%	日本へ輸出 輸出總額 對する日本 輸出%	日本へ輸出 輸出總額 對する日本 輸出%
一九二七—二八	千磅 九、九二四	千磅 六六、〇九七	千磅 八九〇	千磅 一四、六三〇
		二五・〇		六・八

1) 三菱經濟研究所、「東洋及南洋諸國の國際貿易と日本の地位」に據り算出す。

一九二八—二九	八、六三	六二、六五	二四・二	一、五四	二〇、三六	六・六
一九二九—三〇	四、四三	三六、六一	三・三	七〇	一〇、〇四	七・〇〇
一九三〇—三一	六、四六	三一、九三	三〇・三	二、七三	一四、七四	一四・四
一九三一—三二	七、四八	三三、〇〇	三三・五	三、三四	一九、一〇	一七・四

五、積極的調整の方法

今日の貿易調整または一般に貿易統制の問題は、戦後の永續的不況、ことに最近の世界恐慌に關聯するものとせば、今日における貿易の意義は、輸入市場としてよりも寧ろ輸出市場としての重要にある。蓋し不況または恐慌は、商品過剰と販賣不足を意味し、従つてこの時代の困難は、輸入よりも寧ろ主として輸出の側にあるからである。

そこで日濠貿易を相互の輸出市場として見る時は、前節に述べたる如く、全體としては吾國は輸出の三%以下を濠洲に出すに過ぎないが、濠洲はその輸出の一二%以上を吾國に出してゐる。また主要商品について見る時は、吾國は絹織物及人絹織物の一四%、綿織物の二%を濠洲に出すに過ぎないが、濠洲は羊毛の二三%を、小麥の一七%を吾國に出してゐる。これによりて見る時は、輸出市場としての相互の重要程度にはかなりの相違がある。即ち吾國にとつての濠洲市場の重要よりも、濠洲にとつての日本市場の方が、遙かに重要な地位を占めつゝあることが證明される。たゞ商品の種類を見る時は、吾國の輸入品は原料品、食料品を主とし、濠洲の輸入品は製造

品を主とするの相違があるに過ぎない。

日濠貿易は斯くの如く相互市場の重要程度を異にし、且つその絶対額は最初に述べたる如く、最近では四對一の不均衡を示しつつありとすれば、之を調整するの途は、何等らかの方法によつて吾國からの輸出を増加するをもつて、最も自然的かつ合理的な方法と考へられる。即ち之によつて絶対額の均衡に近づき得ると共に、吾が輸出市場としての重要性を加へ得るからである。それはまづ吾國の輸入を標準として、彼國への輸出をその程度にまで増進せんとするものである。即ち不均衡の大なる方を標準として、小なる方をその程度に引上げんとするものであるから、之を假りに積極的調整の方法といふ。

然らば問題は先づ、如何なる商品を吾國より濠洲へ増出し得るかにある。それには先づ、すでに今日までに吾國より輸出しつつある商品につき、その増加の可能性如何を考へねばならぬ。それは前述の如く、絹織物及人絹織物・綿織物・陶磁器・玩具・硝子及同製品・生絲等の諸商品である。このうち最も進出の可能性あるは綿織物であらう。

第一に綿織物は濠洲輸入品の首位を占め、輸入総額のおよそ一〇%に及んでゐる。最近は保護政策の影響をうけて著減したけれども、尙ほ年々四百萬磅を輸入しつつあるに拘らず、その九〇%までは英國より輸入せられ、吾國は五%内外を占むるに過ぎない。いま濠洲に輸入せらるゝ綿布の國別割合を示せば第八表の如くなる。

第八表 濠洲における綿布輸入先¹⁾

年次	總額	英國		米國		日本	
		價額	歩合	價額	歩合	價額	歩合
一九二七—二八	八、一五五 <small>千磅</small>	七、四四 <small>千磅</small>	〇九%	三、二〇 <small>千磅</small>	三八%	二、五六 <small>千磅</small>	三一%
一九二八—二九	七、三三二	六、五〇五	〇九八	二、六七	三七	二、四六	三四
一九二九—三〇	七、四四三	六、七四〇	〇九六	二、五五	三六	二、五三	三四
一九三〇—三一	四、〇五四	三、六〇六	〇八九	一、四八	三七	二、〇八	五一
一九三一—三二	四、一三三	三、六八	〇七六	一、五	三七	二、一	六八

今かりに、吾國がこの五〇%を輸出しうるものとせば、之によつて約三千萬圓の輸出増加となり、これだけでも前述の不均衡は大いに調整されることとなるであらう。

そこで何故に英國綿布が前表の如く九〇%内外の優位を占むるかと言ふに、その最も重要な原因は、英國綿布に對する特惠關稅、從つて吾國綿布に對する差別待遇にあると言はねばならぬ。左に最近五年間の綿布關稅を示す。²⁾

綿布輸入關稅	一般關稅率	英國特惠關稅
一九二九年	一五%	無稅
一九三〇年	一五%	無稅
一九三一年	一五%	無稅
一九三二年	二五%	五%
一九三三年	二五%	五%

第二に問題となるは人絹織物である。その年々の輸入百數十萬磅のうち、英國は四〇—五〇%を占め、吾國は最近漸く一〇%以上に達したが、尙ほ佛國の半ばにも及ばない。第九表にその割合を示す。

1) 三菱經濟研究所、前掲書 P. 37° に據り計算す。
2) 同書 P. 37°

第九表 濠洲における人絹織物輸入先¹⁾

に貿易調整を實現せしむるであらう。即ち今日の不均衡の有力な一つの原因は、實は兩國貿易の自然の結果ではなくして、英帝國ブロックより來る人爲統制の結果である。この人爲的障害さへ除かるゝならば、或程度に日濠貿易の問題は解決さるゝ筈である。

なるほど吾々は、濠洲が自國産業の保護のために設くる關稅ならば、強ちに之を責めることは出來ない。併しながら、濠洲に行はるゝブロック主義に基づく差別關稅は、決して單なる保護關稅ではない。保護關稅ならば、英國品たると日本品たるとによつて、差等はあり得ないからである。そこに差等を設くる以上は、それは單なる經濟的理由以上に、他の理由を認めねばならず、而も吾國がこの差別關稅の撤廢を要求しうる根據は、論じ來れる如く全く經濟的理由に基づくものである。

六、消極的調整の方法

いま假りに濠洲の差別關稅を撤廢して、對等の資格において、吾が商品の進出を許したとしても、五千萬圓の輸出を二億圓に増加して、わが輸入と均衡せしむることは困難であらう。況んや英帝國ブロックの結成のために、差別關稅の撤廢は困難であるとすれば、日濠貿易を積極的且つ絶對的に均衡せしむることは更に困難であらう。そこで問題は、必ずしも絶對的均衡を期することなく、たゞ出來るだけ之に近づけんとする相對的均衡を期するか、または寧ろ消極的に、過

まづ羊毛について見るに、輸入の九五%までを占めて、殆んど獨占的地位を有する。十年前にはイギリス羊毛も相當の地位を占めたが、最近では之を驅逐してしまつた。加ふるに吾國では、今後の人口増加と生活様式の變化のために、羊毛需要はますます増大の勢にあるから、濠洲羊毛の輸入は、自然放任の結果としては、今後ますます増大するものと考へねばならぬ。いま消極的調整の立場から、之が輸入を抑制すべく、何等かの工作を加へるとすれば、そこには二つの方法が考へられる。

第一は、他の諸國からの輸入をもつて代用せしむる方法である。すでに壓倒せられたイギリス羊毛は問題外として、昨年の羊毛輸入の中には、アフリカ（二百五十萬圓、輸入總額の一・五%）とアルゼンチン（二百四十萬圓、同じく一・五%）との二國があり、且つこれらの地方は、吾國將來の輸出地として、その羊毛輸入を獎勵すべき地方であるから、或程度に濠洲に代るべき可能性はある。濠洲羊毛については、まだ未知數といふの外ない。

第二は、國內代用品の有無である。羊毛の國內生産は殆んど不可能としても、特殊人絹の發達は代用品の國內生産を可能ならしむるかも知れぬ。今もし、濠洲の差別關稅に對抗する必要上から、吾國の羊毛輸入にも差別關稅を課するとせば、前述の他の地方からの輸入を増加しうると共に、國內代用品の生産を獎勵することゝなるであらう。羊毛は原料品であるといふ意味では、關稅を排斥さるべきものであるが、併し原料品・食料品のうちでは、比較的その可能性の多いもの

であり、將來もしも吾國において輸入統制の必要が加はる場合には、その問題となるを免がれ得ないであらう。

次ぎに小麥輸入における濠洲の地位もまた、最近急速に向上して八〇%内外を占めてゐる。この競争國はカナダであつて、數年前までは却つて優位を保つてゐた。それ故に小賣價格の變動如何によつては、今後といへどもこの地位に變化は起るであらうが、併しそのカナダもまた英帝國ブロックの一員であるのみならず、吾國にとつては濠洲と同じく入超國である。従つて濠洲小麥をカナダ小麥に轉換せしむることは、特に大なる意義を有つわけではない。こゝでは寧ろ、國內生産が問題となる。

わが國は大正十五年以來、農業保護のために小麥關稅を課してゐるが、その影響は輸入數量の上には餘り現はれてゐない。然るに最近の農村恐慌を救済する一方法として、農林省は昨年以來、謂はゆる小麥増産五ヶ年計畫を發表して、來るべき五ヶ年間に、小麥の自給自足を實現すべく努力しつゝある。これが成功の曉には、濠洲小麥の輸入は大なる程度に減退すべく、幸に所期の結果を齎すとせば、年々に三千萬圓ないし四千萬圓の輸入を防遏して、日濠貿易は大いに調整されることとなる。小麥増産計畫は、單にこの意味から見ても、甚だ意義あるものと言はねばならぬ。

かくして羊毛および小麥について最大の消極的調整を行ふとしても、之を吾が輸出の程度にま

で、即ち二億圓から五千萬圓にまで引下げるとは殆んど困難であらう。そこで同時に輸出増進による積極的調整につき、前述の如き方法を講ずることとせば、絶對的均衡に達することは困難であるとしても、尙ほ可なりの程度に調整の目的を達することが出来るであらう。

七、日濠問題の特異性

日濠貿易の調整を中心として起るべき日濠問題は、之と類似の他の諸問題、ことに日印問題、日蘭問題等に比較して、如何なる點にその特異點を有するか、

第一に、吾國の著しき入超を前提とする點において、日蘭問題とは全く逆の關係にあり、また日印問題とも異なる關係にある。即ち昭和八年の統計によれば、日濠貿易は、四對一の比を以つて、吾國の入超を示すに對して、日蘭貿易は一對三の比を以つて吾國の出超を示してゐる。然るに日印貿易は、はゞ一對一の關係において均衡してゐる。この關係よりすれば、日蘭貿易の調整が蘭領印度より要求される以上に、日濠貿易の調整は吾國より要求されねばならぬ。また英領印度における差別關稅を撤廢せしむるために、印棉不買が叫ばれ、且つ實行されたとすれば、濠洲の差別關稅が高化された曉には、濠毛不買もまた問題となり得るであらう。

第二に、濠州差別關稅の將來もまた、印度差別關稅と同じ轍を踏むものであらうか？なるほどすでに今日でも、そこには著しき差別關稅があり、これが吾が商品の進出を妨げつゝあること

も事實ではある。またこの差別關稅は純然たる經濟的理由以上に、英帝國ブロックより來る政治的理由に基づくことも、英領印度と同様である。最近傳へられる所では、近く第二のオッタワ會議を濠洲に開催して、英帝國ブロックを更に強化し、これ等の差別關稅を更に強化するものがある。これが果して實現したとすれば、そこに第二の日印問題を再現する危険を蘊するが、併し濠洲と英印とはその國內經濟の事情を異にするから、必ずしも同じ轍を踏むとは限らない。即ち英印は今や農業國から工業國への轉換期にあるに反し、濠洲は最近では工業保護政策の矛盾を強く感じつつある。従つて英印の差別關稅は印度保護と同時に英國保護を意味するに反し、濠洲の差別關稅は濠洲保護よりも寧ろ英國保護の方が強いと考へられるから、關稅自主權を有することでもあり、差別關稅の強化には一定の限定がある。従つてまた、印度の如き禁止關稅には恐らく立ち到らぬであらうと思はれる。

第三に、假りに全くの政治的理由から、濠洲關稅が禁止的に高められたとすれば、恐らく濠毛不買に進むわけではあるが、併し之と印棉不買とは可なり事情を異にする。その一は輸入原料品としての兩者の吾國における地位が、甚だ相違するからである。即ち羊毛の地位は殆んど獨占的なるに反し、印棉には米棉その他の競争品が併存するからである。その二は輸出先としての吾國の地位が、兩者において甚だ相違するからである。即ち印棉市場は吾國によつて殆んど獨占するに反し、濠毛市場としては吾國よりも英國がより重要な地位を占めるからである。この二つ

の事情のために濠毛不買は印棉不買に比較すれば、寧ろ勞多くして、效少なき結果を來すであらう。即ち之によつて受くる吾國の苦痛は、印棉の場合に比し、より大きく、之によつて與ふる相手方の苦痛は、より少ないであらう。それ故に最後の方策として已むを得ざる一時的の緊急手段としてならば兎も角、然らざる以上は、まづ普通の對抗策としては、『通商擁護法』の發動による濠毛課税を第一に試むべきであらう。

第四に、吾が輸出市場としての濠洲は、英印または蘭印に比して著しき相違を有する。その一は、英印には約三億五千萬、蘭印には約六千萬の人口を擁するに反し、濠洲には僅かに六百六十万を擁するに過ぎない。その二は、その人口の構成が全く相違する。即ち前二者の大多數は、購買力の最も貧弱なる土民より成るに反し、後者の殆んど大部分は歐羅巴からの移住民およびその子孫より成つてゐる。従つてこの三國は、著しくその各々の國民經濟の性質を異にせねばならぬ。従つてまた、そこに進出せんとする吾が輸出貿易は、それ／＼にその狙ひ所を異にせねばならぬが、その詳論は之を他の機會に譲ることとする。(九・六二〇)